

| | | | |
|-----|----------|---|------------|
| 正会員 | ○佐古 奈々美* | 同 | 北沢 猛** |
| 同 | 柏原 沙織* | 同 | 前田 英寿*** |
| 同 | 松尾 真子* | 同 | 丹羽 由佳理*** |
| 同 | 佐藤 亮洋* | 同 | 砂川 亜里沙**** |
| 同 | 上田 恵莉* | | |

地方小都市 中心市街地再生 ワークショップ
 衰退商店街

1 研究の目的

本稿は「その1」に続き、福島県田村市船引地区（以下、船引地区）を事例に、地方小都市のまちづくりに取り組んだ研究である。「その1」では複数のスケールから空間構造を分析した。「その2」では、地元の意向抽出と機運向上に向け行なったワークショップを報告する。

ワークショップは参加型まちづくりの有効な手段として定着した感がある。盲目的に多用すると、「ワークショップ疲れ」というマンネリ化を招く恐れがある。まちづくりの解法は容易に見つからない。長期に議論を継続させる中、参加者の意欲を維持するには、ワークショップの企画や進め方に段階的な工夫が必要である。

本稿が述べるワークショップは、2007年度後半に福島県三春土木事務所と東京大学空間計画研究室が共同開催した「まちづくりワークショップ」である。テーマは栄町通り。JR 船引駅から南東に伸びる約 300m の商店街である。日本たばこ産業が撤退するまで商業隆盛を誇った。現在は空き店舗が混じり、活気を失っている。裏通りや後背地など周辺も含めて、地区の将来像を議論した。田村市職員も参加、地元土ホコンサルタント会社が事務局を務めた。11月から1月まで4回開いた。

2 既往のまちづくり活動と住民の意識

これまでのまちづくり活動や住民の意識は、既往報告書・ヒアリング調査より把握できる。

平成 12 年・13 年と船引町まちづくり委員会（大滝根川河川改修検討部会）が河川改修事業計画について検討したが、緊急性のないことや予算削減のため中止した。2007 年度には福島県県中設計事務所主催のワークショップが 8 回開催された。

「船引町中心市街地活性化基本計画」（平成 15 年）の策定過程においては、インターネットを利用したデジタルワークショップ（船引町主催）、商工業者を中心としたワークショップ（同主催）が開催されている。後者では事業の実施時期・区域・実施予定者・予定支援策まで検討されている。行政主体のハード事業は一部実現したが、民間施策は計画停止が多い。

「中心市街地地域づくり」として、4 度に渡る勉強会（福島県三春土木事務所主催、平成 18 年）が開かれた。まちあるきを行い、今後のまちづくりについて話し合いを重ねているが、アイデア出しに終止した。

まちづくりワークショップの前後に住民にヒアリングした。報告書や提案で終わっていることに対するいらだち、事業化しない議論に対する消耗を耳にした一方で、まちづくりを行政頼みにしている傾向も伺えた。

3 まちづくりワークショップのプロセス

各回のワークショップは下記のようにテーマとともに進め方や作業方法を変えながら行なった。（表 1）。

1) 第 1 回（2007 年 11 月 3 日） 視察による可能性と課題のあぶり出しである。28 名の参加者を 3 グループに分け、地区を踏査後、「住みやすいところ（良い点）」と「住みにくいところ（悪い点）」を KJ 法にて意見を出し合った。対策や改善点も議論した。空き店舗や空き家への問題意識、大滝根川の重視など想定内の意見にとどまったのは、テーマ設定に工夫がなかった為と考えられる。

2) 第 2 回（11 月 5 日） 前回と同じ方法で、テーマを「住み続けるためには」に改めた。企画側が考えるまちづくりの方向性を投げかけた形である。出したアイデアを付箋で地図にプロット打ちすることにした。こうした前向きなテーマと実体的な作業が、参加者をまちづくりに参加している気分させたと思われる。

3) 第 3 回（11 月 30 日） プランニングの初歩を取り入れた。前回までの意見のリストを見せ、それらを材料にして“まちづくりのシナリオ”を作成した。「最初に出来るようなこと」「最初に取り組むべきこと」から議論を始めた。それを実現する方策や道筋を提案した。

4) 第 4 回（2008 年 1 月 18 日） 最終回は対象を栄町通りに絞った。「空き家・空き店舗対策」「JT 支所跡地の活用」「緑地・道」の内 1 テーマを各グループに与えた。それらを実現するための方法を議論した。最後に、全テーマの俯瞰した後、個々人が自らやりたいあるいは出来る方策にシールを貼った。この結果、通りの歩行者優先の社会実験や空き店舗情報ネットワークの構築など、

次年度以降実際に取り組めるような施策案が出された。

4 まちづくりワークショップの特徴

前記のように各回工夫したのは、ワークショップ疲れを回避するとともに、参加者がまちづくりの主體的に関わるように促す意図もあった。

1) 空間的ツールの利用 全4回とも地図、航空写真、地域全体模型など空間的ツールを使用した。提案が集中した駅前商店街は、提案を検証するため地区模型を作成、小型カメラで街並をシミュレーションした(第4回)。

2) 各主体が参加の方法を表明 各自の関与を申告することで、それぞれの役割が分かるよう工夫した。現在の立場でやれること、一市民として参加することなど様々な視点が得られた(第4回)。

3) 行政職員がメンバーとして参加 全4回とも学生が企画し、ファシリテータを務めた。学生が一種の触媒となって、住民と行政職員が対等に意見を交換できる場ができた。地元からも高校生など若年層の参加を促したい。

5 まちづくりワークショップの効果、課題、展望

1) 住民ができることを実感 “自分ほどの提案に協力できるか”を示したことにより、行政側はインフラ整備等のハード面、住民はソフト面でのまちづくりに協力できると感じている一方、現地に赴くことの少ない学生は、インターネットを利用した提案や社会実験等、限られることが分かった。行政への不満が大きかった住民が、「空き店舗のシャッターを開ける」ために「持ち主の情報を集める」等のソフト面で協力できるという意思表示をし、

住民の立場からまちづくりをするきっかけになったことが伺える(表2)。「実践に移したい」「インターネットを利用して、町のPRをする」という記述があり(アンケート調査)、今後のまちづくりを進める上で意義ある取り組みであったといえる。

2) 多主体が認識を共有 空間的ツールを用いたことで、将来像や方法論について、漠然とではなく具体的に議論できた。また駅前商店街など住民が重視している場所が明らかになった。

参加者からは「刺激的だった」(第3回)という意見が聞かれ、「ワークショップに参加してよかった」と答えたのは17人中15人、「まちづくり活動に参加したい」と答えたのは14人と、高い満足度が得られた。

合併後、「役場に知らない人が増えた」という意見が聞かれ、住民と行政職員が身近でなくなっていたが、行政職員参加型のワークショップを設けたことで、交流のきっかけとなった。

3) 行政メンバーのハード分野への偏り ワークショップへ参加した行政職員の所属の偏りがあったことが反省点として挙げられる(産業建設部)。ソフト政策について住民の前向きな姿勢を今後のまちづくりに繋げるため、他部署からの広い参加が期待される。

謝辞 本研究は田村市からの研究委託「田村市中心市街地まちづくり基本方針」の一環である。市民はじめ田村市市長及び職員との合同調査や議論から示唆を受けた。

表1 まちづくりワークショップの流れ

| 目的 | 資源・課題の整理 | 具体的に提案 | 長期的に将来像を描く | 実現可能性を考える |
|-----|---|---|--|---|
| 実施日 | ① 2007年11月3日 | ② 2007年11月5日 | ③ 2007年11月30日 | ④ 2008年1月18日 |
| 参加者 | ・住民 5名 ・大学生 10名 ・県職員 4名 ・市職員 9名 | ・住民 8名 ・大学生 10名 ・県職員 4名 ・市職員 8名 | ・住民 21名 ・大学生 6名 ・県職員 2名 ・市職員 8名 | ・住民 16名 ・大学生 7名 ・県職員 2名 ・市職員 7名 |
| 内容 | ・船引町中心市街地のまちあるき ・住みやすい点(良い点)、住みにくい点(悪い点)について意見の出し合い ・改善アイデアの出し合い | ・「住み続けるには」というテーマで、提案の出し合い ・提案を地図にプロットし、ダイアグラムを作成 | ・第1回・第2回で出たアイデアを元に、「取り組みやすい提案」「取り組むべき提案」から順に、目標達成までのシナリオの作成 | ・駅前商店街に場所を絞り、3テーマに分かれ、提案を実現するための手法の話し合い ・「自分が何らかの形で協力できる」と思った手法にシールを貼り、意思表示 |
| 結果 | ・空家、空き店舗に対する問題意識が高い。 ・川を身近に感じられる生活に誇りを感じている。 | ・駅前から商店街への提案が多い。 | ・外部人口誘致によるまちなかの賑わい創出を図る、というシナリオが共通していた。 ・重視された場所は駅前～商店街。 | ・市職員はインフラ整備などハード面、住民はソフト面のまちづくりに協力意思。 ・どの主体からも協力の意見が多い提案があった。 |
| |  |  |  |  |

*東京大学大学院新領域創成科学研究科 修士課程

**東京大学大学院新領域創成科学研究科 教授

***柏の葉アーバンデザインセンター

****コングレ

*Master Course, Graduate school of Frontier Sciences, University of Tokyo

**Prof., Graduate school of Frontier Sciences, University of Tokyo

***Urban Design Center Kashiwa-no-ha (UDCK)

****Congress Corporation